

## 外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での 学習到達目標設定に関する緊急説明会 実施報告

本年度より、高等学校の新学習指導要領が年次進行で実施されるが、このうち、外国語教育の着実な実施に資するものとして、去る平成 25 年 3 月、文部科学省は「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」を作成し、公立学校関係者には周知を図っている。

本件は、グローバル社会に通用する高度な英語力の習得を目指す具体的な一方策として私立学校においても活用が期待される場所であり、各学校における外国語教育の指導と評価の改善に向けた取組の参考に資するため、文部科学省及び手引き作成の責任者より急遽説明を受ける機会を設けた。

説明会は、5 月 25 日（土）、東京都新宿区、市ヶ谷駅前の TKP 市ヶ谷カンファレンスセンターで開催し、全国各地から約 300 名が参加した。その概要は以下の通りである。

まず、開会式において、当研究所の吉田晋理事長から「グローバル人材育成に当たって英語教育の充実には欠かせないものであり、また、英語教育の充実を標榜する私立学校は多いことから今般の説明会には大変期待している」との主催者挨拶があり、また、中川武夫所長からは、説明会の趣旨説明を兼ね「英語科教員が教育現場で大変な思いで授業をしており、これを少しでもサポートするために当研究所としては出来る限りの支援をしていきたい」との挨拶があった。



【左：開会式での吉田晋理事長の主催者挨拶。右：同じく中川武夫所長の趣旨説明】

引き続き、文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室長の田淵エルガ氏より、「小中高等学校における外国語教育」と題し、我が国の外国語教育政策についての説明が行われた。

この中で、グローバル化の中での我が国の現状について触れ、企業が社員に求めている能力・スキルと社員の意識には大きな乖離があり、そこには外国語能力の欠如が根底にあると指摘した。昨今のグローバル人材育成に係る政府・与党の各種提言では、外国語教育の推進が中心になっており、また、現在の小中高等学校における外国語教育の現状でも、特に、英語教育については、授業時数の増加、生徒・教員の英語力向上のための具体的な指標などが示されており、国を挙げて学校における外国語教育の充実に重点的に取り組む姿勢であるとした。グローバル人材の定義で言えば、我が国の児童・生徒たちは、コミュニケーション能力などはあり、外国語能力のみ欠けていると指摘した。



【田淵エルガ氏（文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室長）の説明】



【熱心に説明に聞き入る参加者】

次に、英語教育の権威である上智大学言語教育研究センター教授・一般外国語教育センター長の吉田研作氏からは、「『授業は英語で行うことを基本とする』～Can-Doを設定することの意味」と題し、Can-Do リストを活用した英語教育の意義について説明が行われた。

この中で、グローバル人材育成の観点では、世界各国との競争力の中でも我が国国民の外国語のスキルが極めて弱く、特に、Speaking 及び Writing が弱いと指摘した。我が国の外国語教育の目指す方向は、アメリカ型の Multilingualism、日常生活から仕事、教育のあらゆる場面で英語ができなければ生きていけないということだけでなく、ヨーロッパ型の Plurilingualism、仕事や教育に主に英語が必要という方向性であるとした。これには、学校教育では Can-Do リストの基礎になる CEFR（Common European Framework of Reference for Languages：語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格）を用いて英語教育を行うことが効果的とした。つまり、我が国の外国語教育においては、ネイティブ・レベルの英語力を求めておらず、将来、日本人として国際社会の中で世界中の人々と一緒に世界の平和と繁栄のために貢献できる人材に必要な英語力を身に付けることが重要だとした。

また、大学入学に当たっての英語の能力を計る試験として、TOEFL を活用する意見があるが、TOEFL は我が国の学習指導要領に準拠しておらず、むしろ、上智大学と公益財団法人日本英語検定協会が共同で開発した TEAP（Test of English for Academic Purposes）が有効だとした。TEAP は、大学で学習・研究する際に必要とされるアカデミックな場面での英語運用力（英語で資料や文献を読む、英語で講義を受ける、英語で意見を述べる、英語で文章を書くなど）をより正確に測定するテストで、テスト形式は総合的な英語力を正確に把握することができるよう「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能で構成され、とりわけ日本の英語学習者の弱点と言われる Speaking と Writing につい

では、世界的に有名な英国のベッドフォードシャー大学の研究機関である CRELLA (Centre for Research in English Language Learning and Assessment) のアドバイスを受けながら開発したことを紹介した。



【吉田研作氏（上智大学言語教育研究センター教授・一般外国語教育センター長）の説明】



【質疑応答の様子】

最後に、本説明会の企画者である当研究所の山崎吉朗専任研究員は、我が国の英語教育を牽引する文部科学省の田渕氏と上智大学の吉田氏による説明は、現時点での最高の人選による説明で、その内容は、今後の私立学校における英語教育の方向性を考えるに当たって大変有意義なものであり、来る6月22日（土）に予定している Can-Do リストを活用した英語教育についての特別研修会に繋がるものだと総括した。



【閉会式での山崎吉朗専任研究員の総括】